

〈最後に支えてくれたのは〉

ジャーナリスト  
松本侑壬子

ジュディ・ガーランドと聞いて、『オズの魔法使』『スタア誕生』と出てくる人は、今ではかなりの映画通といえるかも。『オズ』は『風と共に去りぬ』と同じ一九三九年、ハリウッド黄金期を象徴する映画である。大きな瞳のお下げ髪の少女ドロシー(ジュディ)とその映画音楽「虹の彼方に」(Over the Rainbow)は、映画を見ていない人にもよく知られている。

この映画でチャンスを掴んだジュディ・ガーランド(一九二二—一九六九)は、以来四七歳の早すぎる死まで、何度も挫折と再生を繰り返しながら、最後までステージを決して諦めなかった伝説の人である。最高峰のミュージカル女優として、ハリウッドやブロードウェイ、ロンドンなどの華やかな舞台の裏では、彼女には苛酷で非情な人生の闘いがあったのだ。本作では、そんなジュディの最後の日々を、

レネー・ゼルウィガー(『ブリジット・ジョーンズの日記』『シカゴ』)が、体当たりで演じている。

一九六八年冬、ジュディ(ゼルウィガー)は切羽詰っていた。『オズ』でハリウッドのトップに踊り出てから三十年。今では二人の幼い子らを抱えて住む家もなく、巡業ステージで糊口をしのぐ毎日。宿泊費の滞納でホテルを追い出され、やむなく元夫シド(シーウェル)に子どもを託すしかない。

かつての大スターがここまでになるには、何があったのか。オーディションでドロシー役を勝ち取った一七歳の少女を、映画会社MGMはドル箱として徹底的に鍛え上げた。反抗は一切許さない。大男のメイヤー社長が「お前より見栄えのいい女の子はたくさんいる。お前の取り柄はその声だ。声で百万ドル稼げる。」「普通の女の子は、大人になれば農家の嫁か、レジ係か、小学校教員にな

る。そこそこ安全で幸せだが誰も気にしない。お前は無理してでも頑張ればスターになれる。強制はしない。嫌なら今すぐ出て行け。決めるのはお前だ」と迫られると、震え上がって謝り、すべてに従うしかない。セクハラもある。こうして、何時間でも仕事が続けられ、すらりとした体形が保てるようにと、興奮剤、睡眠薬、減量剤など薬でコントロールされ、疲労は溜まっていく。アルコールも手放せなくなりジュディは、神経を病み、情緒不安定から撮影に穴をあけるようになり、一九五〇年にはMGMから解雇されてしまったのだ。

子どもと別れたジュディは、生活立て直しのため単身ロンドンへ。ショーの直前まで舞台袖で弱音を吐いていたが、舞台でスポットライトを浴びると、別人のように見事なエンターテイナぶり。大成の舞台は続くが、テレビの心無いインタビューに脆くも心が折れ、舞台で大失態。もはやジュディの舞台生命はここまでか、と誰もが固唾を呑んだその時に…。

驚くべき出来事がジュディを救う。奇跡のような、実際の出来事だという。

「シネマ女性学」は今号が最終回となります。二八年間の連載で、三百本を超える作品を紹介させていただきました。ありがとうございました。

『ジュディ 虹の彼方に』

イギリス映画(118分)

監督：ルパート・グールド

出演：レネー・ゼルウィガー、ルーファス・シーウェル、フィン・ウィットロック、ジェシー・バックリーほか

3月6日(金)全国ロードショー

©Pathé Productions Limited and British Broadcasting Corporation 2019

